

『地方の救急病院小児科での「超音波教育」奮闘記』

末広ひなたクリニック小児科
(徳島県立中央病院小児科非常勤) 森 一博

徳島県立中央病院小児科は、2012年より徳島県東部地区の小児(在胎30週齢以上の新生児を含む)の24時間救急を8名の医師で行っています。本講演では、地方救急病院小児科で悪戦苦闘しながら開拓してきた超音波教育の歩みをご紹介します。

海外では、一般小児科医が救急の現場で行うPOCUS(point of care ultrasound)プロトコルがいくつか提唱されていますが、当院の救急実情には必ずしも合致していません。そこで、まず「当院小児救急に必要な28病態」という独自のマニュアルを作製しました。また、院内・院外mailを利用して、入院患者に関する具体的な超音波診断のポイントを動画も交えて頻回に紹介しました。深夜は小児医一人対応となるため、超音波検査に自信が持てないことが稀ではありません。そのため上級医や超音波検査士との連動、残した電子カルテ内動画の翌朝の評価など、「検査後の対応」を明確にしました。

ある程度経験を重ねた医師のためには、テーマ別に「Beyond the POCUS」を配布しました。たとえばNICUでは、一步進んだ「動脈管のドプラ評価」や「左室の大きさと収縮」に対する理解も必要であり、分かり易いスライドを作製しました。このように日常診療における超音波検査の必要性を理解してもらうことで、超音波検査件数は10年間で8倍以上に増加しました。

当院小児科の小児超音波2大キャッチフレーズは「楽しくなければ超音波でない」「当ててみなはれ。当てなわからしまへんで」です。研修医の先生には「まずはあまり型にとらわれず探触子を当ててみて、一つでも成功体験を増やし「超音波の有用性を体感してほしい」と願っています。超音波の学習はそこから始まると確信しています。[参考資料] 「能をつかんとする人」 吉田兼好. 徒然草 1331年; 150段
「いまだ堅固かたほなるより、上手の中にまじりて、毀り笑はるるにも恥ぢず、つれなく過ぎて嗜む人、道になづまず、みだりにせずして年を送れば、並びなき名を得る事なり」

【略歴】 昭和54年 岡山大学医学部小児科 入局
昭和57年 東京女子医科大学日本心臓血圧研究所循環器小児科 入局
平成5年 徳島大学 医学部小児科学講座 入局
平成8年 高知赤十字病院 小児科 医長
平成16年 徳島大学医学部 小児科 助教授
平成19年 徳島市民病院 小児科 総括部長
平成23年 徳島県立中央病院 小児科部長
令和2年3月徳島県立中央病院 小児科部長 退職
令和2年4月末広ひなたクリニック小児科勤務
徳島県立中央病院小児科非常勤